

京都探勝会等に見る 旅行愛好団体の生成と限界

地域・コミュニティが生み出した
明治期の観光デザイナーたち

小川功

Isao Ogawa

跡見学園女子大学 / 教授
滋賀大学 / 名誉教授

I はじめに

現在の日本では観光客を受け入れる側の地域が自らの資源を生かした観光を自律的にデザインする着地型観光が主流となりつつある。同時に発地側でも旅行者が自らの趣味や嗜好に基づいて自律的に観光をデザインする会員制旅行クラブという形態が注目を集めている。この形態の創始者ともいべき高橋秀夫氏は1960年代近畿日本ツーリストの馬場勇が「サンフラワー・クラブ」という会員組織を作り上げた事実が、後年高橋氏が機関誌を発行し、顧客リストを基盤として顧客一人一人の趣味や嗜好を尊重する会員制旅行クラブ事業たる「クラブツーリズム」を創始した原点となったと述べている¹⁾。

1980年代に同社支店で高橋氏が上記の実験を開始した当時、「新聞媒体で旅行者を募集している旅行会社はまだまだ少ない状況」(CT, p43)で、1983年9月に会員向広報誌『旅の友ニュース』第一号を創刊した。(CT, p65) こうした経緯で新聞媒体・会誌を基軸とする会員制旅行クラブ事業を馬場、高橋らが推進し、現在のクラブツーリズムに成長したことは疑いない。しかし旅行者自身が自らの多種多様な趣味・嗜好にそって、自律的

1) 本稿では高橋秀夫『理想の旅行業クラブツーリズムの秘密』(毎日新聞社、平成20年)をCTと略し、本文中に(CT, p79)と示すように、頻出する会社録、基本文献等は以下の略号を利用した。

[主要参考文献]

- ①会社録／紳…『日本紳士録』交詢社、衆…猪野三郎編『大衆人事録』三版、帝国人事通信社、昭和5年、
- ②新聞・雑誌／日出…『京都日出新聞』、
- ③観光案内書／
 避初…探勝会編『避暑旅行案内』初版、明治33年7月、
 宇治…舟木宗治『宇治名勝案内記』明治34年9月訂正五版、
 避三…探勝会編『避暑旅行案内』三版、上田屋書店、明治35年7月、

に観光デザインすることを目指した会員制旅行クラブなる組織そのものは、実は財団法人時代の日本交通公社にも「日本旅行倶楽部」の活動実績があり、さらに戦前期には幅広く一般的に存在した普遍的形態である。たとえば昭和5年9月発足の関東旅行クラブの会則を例にとると、「本会を関東旅行クラブと称へ、毎月一回以上、主として休日に旅行するを目的とし…入会御希望の方は、会員の御紹介を要し…会費は一ケ年金参円とし…毎月一回会報を発行して、旅程其他諸般の事項を報告」²⁾するという、毎月一回会報を発行して参加者を募る典型的な会員制システムであった。

現在の観光学の主流ではこうした戦前期の旅行団体に着目した文献は余り多くないようであるが、昭和初期の鉄道省(現国土交通省)で民間の旅行団体の流行にいち早く着目して、鉄道省のエリアに引き込み、自家菜籠中の物とした高級官僚が旅客課長種田虎雄(退官後に近畿日本鉄道社長)であった。種田は東京アルカウ会の主宰者「三好善一」を援助して、日本旅行文化協会を設立(種田, p90)し、東京アルカウ会の機関誌『旅』をも換骨奪胎して、実質的に鉄道省公認の機関誌に格上げすることに成功した。個人の趣味・嗜好分野という、本来官に馴染まない分野をも鉄道省翼下

に取り込み、その成長を旅客需要に組み込もうと考えた種田の炯眼でもあった。同じころ種田は地方の小洋式ホテルといえども観光立国に寄与する貴重な戦力だと見抜き、一流ホテルだけに限定しようとする協会筋の「偏狭な意見にまっこうから反対した」(種田, p89)といわれる。無位無冠の民間旅行団体の代表者を厚遇し、民間機関誌ごときを権威ある“お上”が継承するといった型破りの芸当は並の官僚には出来ない技であり、後に群小私鉄・バスを大統合して大・近鉄を誕生させた功労者で、数々の武勇伝も伝わる種田だけのことはあろう³⁾。

本稿ではこのように大正期・昭和初期には無数に群雄割拠した各種の旅行団体のうち、明治期に発生した「探勝会」⁴⁾という原初形態に着目して、いかなる人物が主導して、どのような嗜好の観光旅行がデザインされたのか、中心的な役割を担ったと目される“観光デザイナー”の人物像に迫ろうと試みた。「探勝会」よりさらに遡れば別の形態の団体旅行群が多く存在する。すなわち近世以前から脈々と継続されている各種の講組織・信仰団体等による団体参拝(団参)がある。また1884年私学の学生親睦会が神田、上野、向島、浅草、日本橋等を徒歩旅行(年表, p147)したなど、学校、職

④基本文献・資料／

頭…妹尾勇吉「頭が下からぬ」『明治評論』12巻7号、明治評論社、明治42年7月、
夢…舟木宗治『柳昇遺稿五十年の夢』舟木保次郎、大正8年、
種田…鶴見祐輔『種田虎雄伝』近畿日本鉄道、昭和33年、
落合…落合重信『神戸の歴史 研究編』後藤書店、昭和55年、
松本…松本佳子「大正・昭和初期における日本婦人アルカウ会の活動」『生活文化史』30号、平成8年9月、
日旅…『日本旅行百年史』日本旅行、平成18年、
年表…旅の文化研究所『旅と観光の年表』河出書房新社、平成23年。

2)「関東旅行クラブ清規」『旅路 第1輯』

関東旅行クラブ編集部編、六合館、昭和6年、p1~2。
同クラブは「私共旅好きが集りまして、毎月一回、井をつつきながら旅物語を致し、井会と名づけ、時にはコースを選んで旅行も致して居りました処…追々会員が増加し、此頃では二百人程になりましたので、一同から、会名変更の上、広く天下同行の士と共に清遊することにし…協議の上、『関東旅行クラブ』と改称」(『旅路』)した。

3) 種田虎雄の事蹟に関しては孫の種田明氏より多くのご示唆を受けた。

4) 本来探勝とは景勝の地を訪ね風景を楽しむこと、景色のいいところを見て歩くことを意味するが、探勝会という俳人・高浜虚子が主宰した「武蔵野探勝会」が名高いため、現在では吟行目的の俳句の会合(句会)のような印象を与える。

域、町内会組織など特定少数の構成員による遠足、修学旅行、慰安旅行等の形態もある。こうした信仰・教育など特定目的のための特定集団の旅行は、宗教史・教育史分野の多くの先行研究に委ね、本稿では考察の対象外とした。

II 明治中期の旅行関連団体(広義)と探勝会組織

1880年ころから各地に保勝会、1892頃から学校の徒歩部、1899年に海水浴会、1905年に最初の山岳会、1910年に市民の徒歩会・アルコウ会等のハイキング団体、1933年に最初のワンダー

フォーゲル部が各々出現している。こうした類似団体の発生状況と比較しながら、市民組織の探勝会、旅行会等と想定される不特定多数からなる団体として、比較的初期に活躍した証拠が得られたものとしては、管見の限りで[表-1]の組織がある。

このうち⑦～⑨、⑪⑭⑮⑯⑰⑱⑳など*印を付したものは南新助、小西旅館、仙台ホテルなどの観光業者・新聞社や鉄道院の駅長(㉔横浜市有志旅行会など)が団体旅行募集に用いた一時的、便宜的な名称と見られる。このうちの⑪は後年の日本旅行会に発展するものであり、いわば営利を目的とする専門旅行者等の系譜につながるものと

[表-1] 初期の旅行団体と目される組織一覧(明治後期・大正期)

①1898 京都探勝会	⑮1908*各新聞社主催遊覧会ブーム
②1900 <東京>探勝会	⑯1909*関西回遊実業視察団
③1900 <大>日本旅行会	⑰1910 神戸草鞋会
④1902 探検会	⑱1911*名所旧跡旅行会
⑤1902 北海道旅行倶楽部	⑲1912 六甲・阪神倶楽部
⑥1903 協友探勝会大阪本部	⑳1913*横浜市有志旅行会
⑦1903*日光遊覧会	㉑1913 祖山参拝団
⑧1903*水戸大洗遊覧会	㉒1914 日本アルカウ会
⑨1903*松島遊覧会	㉓1916#伊那風景探勝会
⑩1905 山岳会	㉔1918 日本婦人アルカウ会
⑪1905*南新助 高野山伊勢参拝団	㉕1919 探勝遊覧会
⑫1906 大阪探勝わらぢ会	㉖1921#愛宕神社団参加
⑬1906 旅行倶楽部	㉗1921#塩浜探勝会
⑭1906*松島観月会	㉘1921 東京アルカウ会

[資料] 注記した資料群により筆者が独自に作成

西暦は団体の設立時ないし資料上の初出年。

*印は業者等の主催する旅行団体、#印は目的地(着地)側の組織と推定。

5 塩浜探勝会は『塩原名勝旧跡の伝説』編者(代表者片山掬泉)が「大正十年の夏、余塩浜に遊ぶ、滞留十数日、偶塩浜知名の士、名勝旧跡研究会の挙あり。余の宿志と、偶然符合せしを欣ぶ。』(『塩原名勝旧跡の伝説』はしがき)と、塩原の名士数名と名勝旧跡を研究するための組織であり、名は探勝会ながら塩原町門前に所在する保勝会の一つと考えられる。

6 「山岳会」は東京飯田橋の料亭「富士見楼」で設立打合せし、初代会長に小島烏水が就任した日本初の山岳会組織である。

当時の山旅は広義の旅行に包含されていたようだが、現在では明確に山岳史研究の範疇にありここでは立ち入らない。

7 阪神倶楽部は阪神電気鉄道が電車乗客誘引策として六甲山上に家屋を所有し、徒歩会等の使用に供した山小屋の名称であって会員組織でない。

8 南新助の日本旅行会とは同名異社の③日本旅行会(又は大日本旅行会)は1900年『日本山水名勝めぐり』、1925年『日本名勝旅行辞典』をそれぞれ編纂し、ともに日本書院出版部から刊行した。

考えている。次に#印を付したものは、名称の如何にかかわらず、旅行先(着地側)の名勝旧跡の景観保護、情報発信、観光客誘致等を目的とする伊那風景探勝会(二本松遊郭の篠田半次郎を中心とする有志が伊那節の歌詞を募集)、愛宕神社団参会(嵯峨村長小林吉明が愛宕神社への団体参詣を促がすために設立)、塩浜探勝会⁵⁾など、着地側に設置される保勝会等の系譜に属するものとして、本稿では考察の対象外とした。

このほか⑩山岳会⁶⁾、⑪阪神倶楽部⁷⁾、大日本旅行会⁸⁾や、情報の極端に乏しい団体⁹⁾等を除き、本稿で主題とする非営利の探勝会、旅行会等の系譜に属すると推定される組織は充足順に京都探勝会、<東京>探勝会(下部組織の④探検会を含む)、<大>日本旅行会、協友探勝会大阪本部、大阪探勝わらぢ会、神戸草鞋会、日本アルカウ会、東京アルカウ会など数団体に絞られる。神戸草鞋会以下のハイキング諸団体には先行研究¹⁰⁾もあるので、本稿では京都探勝会、探勝会(東京)との対比上若干の言及にとどめた。また本稿で対象地域を三都と神戸に限定したのは主に筆者の土地勘の及ぶ範囲から調査開始したにすぎず、横浜、名古屋、福岡、その他諸都市の情報に接する機会を得なかった筆者の怠慢であり、これ以外の地域でも同種の団体が活躍した可能性を排除するものではない。現に仙台地区等に存在した旅行団体の系譜については別稿¹¹⁾を予定している。

後者では扉で便宜上、大日本旅行会編纂を名乗りながら、序では「日本書院の旅行辞典は独創出版として永続する」云々と日本書院を強調するにとどまり、出版社と緊密な関係にある別働隊という以外は判明しない。

9) 除外した⑨北海道旅行倶楽部は

「北海道旅行倶楽部規則」(道立図蔵)が存在、

⑥協友探勝会大阪本部は明治36年1月機関誌『若緑』1号を創刊(天理図書館本館所蔵)、⑬旅行倶楽部は同名の資料(明治39年8月)が歴史民俗博物館に所蔵されており、全国鉄道旅館同盟会が刊行した図書『旅行倶楽部』と同一とみられる程度で、今後の調査に待ちたい。

Ⅲ 京都探勝会

京都探勝会は一市民が明治31年機関誌を刊行して隠れた名勝地を会員に、世に紹介すべく広く市民各層に呼び掛けて組織した古参の探勝団体の一つである。代表者の舟木宗治(京都市上京区室町通中立売上ル薬屋町九番戸)は嘉永四年生れ、「京都の人、世々室街正親町の邸に住」(森田篤三郎、夢, p297)む「朝廷の直臣、官人…図書寮史生」(夢, p1)の傍ら、「内業を許され…御手道具、小間物、玩弄品を調進」(夢, p2)する宮中出入商人を兼ねた。教育関係等の公職・名誉職多数を歴任したが、家業の玩具商は「病気の為め其業を廃するに至り」(夢, p272)、自らは「明治十四年胃潰瘍に羅り起たざる事三年、医師の勧告に依り気楽に保養し、旅行に勉むることとせり。是れ予が泉石の病を發せし原因なり」(夢, p272)と回顧していた。今様のアウトドア愛好家で「夙に海水浴の信者として、八月は連年須磨の砂浜に…子女同伴の煩瑣なる自炊生活を…軽便巧妙に営」(関口秀範、夢, p298)み、「学校児童の遠足に同行して自ら東道の主人となり、或は一家を挙げて夏期を海浜に送」(村雲聡信、夢, p285)るのを常としていた。明治21年から約11年間京都府議員を勤め、府議を退任後の明治36年には京都繁栄策として「市税軽減論」¹²⁾を展開した。雨森菊太郎によれば舟木は「会社の株主としても総会には必ず出席して其議案の可否を言明し、株主たるの義務を尽され

10) 基本文献に掲げた落合、松本論文のほか、山崎彦磨『山岳美』日本アルカウ会、大正11年、『日本山岳会百年史』日本山岳会、平成19年他。

11) 「松島回遊列車旅行を主催した“観光デザイナー”-和風旅館・洋式ホテル・駅構内食堂・列車食堂等の総合経営者・大泉梅次郎を中心に-」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第16号、平成25年7月

12) 宮野孝吉(古愚)編『名家訪問録 京都策』合資商報、p189

た](雨森菊太郎、夢、p294)と、彼の頑固なまでの真面目さに感心する。

本人は中立売上ルの自宅内に「明治三十一年京都探勝会を設け、五ケ年間遠近旅行趣味を作興せしに、幸にして毎年一千余人の会員を得たるは偏に知友の友誼上奔走に依る処多く、深く徳とする所なり」(夢、p273)としたが、仲間からは「名誉職を退かれて多少閑散の身となられたので、其旅行癖は年を逐うて益々其度を高め」(川村文芽、夢、p282)、その「果ては同好者を募りて、探勝の会を組織」(村雲、夢、p285)したと見られていた。最初の本格的な案内記である『宇治名勝案内記』の巻末で「著者宇治に一步の土地を有せず、聊かの縁故もなし。唯名勝地を愛するの癖あるより、井蛙の浅見を顧みず、此記を草し全国に発兌す」(宇治、p22)と執筆理由を述べた。初期の会員の一人・草間和楽は「明治某年の夏」(草間、夢、p292)舟木に誘われ宇治鳳凰堂の特別参観の帰途、「兎道河畔亀石鉢泉に一浴し…胸襟を披きて歓話数刻」(草間、夢、p292)、こうして草間は「君の知を辱うせしは彼探勝会創設、雑誌発行実之れが媒介たり」(草間、夢、p292)と創設期の両者の邂逅を回顧している。

31年以降、少なくとも数年間にわたり継続した京都探勝会としての活動は「毎月冊誌を刊行し名勝の地にして世に隠れたるものを公衆に紹介し、或は鉄道局に交渉して乗車賃を軽減し、或は地方の有志者に勧誘して休憩所を設備せしめ、以て都人士遊意の勃興を促し、高尚幽玄雅なる気風を養はしむる」(森田、夢、p298)という多種多彩な内容であった。京都探勝会としての第一回旅行は32年5月頃「牡丹の勝地として名高く避暑にも適当地」(「桜花(四)」M34.4.7 日出⑦)の「奈良春日

の藤と初瀬の牡丹」を訪ねた。34年5月の長谷寺は40年代から始まる夜間裝飾電灯¹³⁾の先駆形態たる「夜牡丹とて境内に多くの提灯を吊り下げ」(M34.5.8 日出④)るイベントを開始しており「泊掛けにて同地へ杖を曳く雅人多し」(M34.5.8 日出④)と宿泊客誘致に取り組んでいた。その後は宇治方面に遊び、回数が判明しているものでは第6回旅行は京都鉄道附近名勝巡り、第7回京都鉄道園部並八木附近名勝巡りといった具合に、団体旅行を何度も実施し、機関誌に「会務報告」等を行った。舟木は「舟木生」の名で明治30年頃から十数年間寄稿を続けた常連の「投書家」(M34.3.23 日出⑦)として、投書家懇親会にも本名の舟木宗治の名で参加した。花季には例年どおり「桃世界」「桜花」等と題した紀行文を「いで例の通り桜狩の案内をものすることとせん」(「桜花(一)」M34.4.1 日出⑦)とほぼ連日掲載した。34年4月に実施した吉野観桜では舟木は「宿泊旅館は京都探勝会員に限り特に竹林院、東南院に特約せり。又た同会々員に限り桜井迄汽車賃四割引」(「桜花(五)」M34.4.7 日出⑤)との会員特典をチャッカリ新聞記事に潜り込ませ、会員獲得策も実施した。35年7月には第14回旅行で富士登岳を行い、記念の絵葉書も発行した模様である。

こうした当会の活発な活動は「当時洛中洛外の同志者に歓迎せられ」(杉野方義、夢、p300)、趣旨に賛同した「会員の盛なる其数三千に垂んとするに至」(森田、夢、p298)り、「会員名簿」は34年12月、37年3月発行の機関誌に付録として添付されたが、「探勝会員の名簿を見るも学者、文士、実業家は勿論、社会の各階級を通じて知名の人々を網羅せる」(草間、夢、p293)広範で多数の京都市民層から構成された旅行組織となった。当時とし

13) 初瀬の牡丹は拙稿「牡丹の植栽・夜間点灯による“観光まちづくり”-門前町・初瀬の観光マネジメントと観光カリスマ・森永規六の尽力-」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第8号、平成21年9月参照

ては、①宗教色がなく、②目的地が特定されず、③特定区域・職域等に限定されず、④3千人という相当数の会員数を擁して、⑤舟木という特定個人の観光デザイナーが引率・誘導する旅行団体として京都探勝会は数少ない特異な存在であったと思われる。舟木自ら組織した京都探勝会は全く非営利であって、「君は何等求むる所なく務めて多数の同好者に満足せしむるを主とし」(草間、夢, p293)、中立校での師でもある森田会員は「其間幾多の私財を投じて一心其事業に従はれしは当時会員たりし人の記憶に存する所」(森田、夢, p298)と感謝した。舟木「翁は常に自費を抛って各地の探勝を行ひ、余人の未だ知らざる山邨水廓を尋ねては其見聞を録し月々探勝記てふ小冊子を発行して之を会員に恵まれた」(川村、夢, p282)のである。特に親しい田村撫松や半桜には舟木は「之に対して批評を書くべく要求…返上したら以ての外に御機嫌が悪い。是非とも書けと突き戻され…書けば書くほど御満足」(田村、夢, p282～3)と、「誰かれにも示し自ら無上の楽事とせられ」(桜井丈太郎、夢, p295)た。日出新聞への寄稿でも「大原 出町橋より北三里…地また歴史上の遺趾に富み…殊に近頃大原温泉の設けられしあり。一遊すべき所とす」(「桜花(三)」M34.4.5 日出)と最近の観光動向にも言及するなど、探勝記の内容は多岐にわたたり、「文学の盛衰より農工商務、経済の消長に及び…読者の趣味を激発して知らず知らず自他奮興の資たらしむ」(梅谷孝永、夢, p291)結果となった。たとえば当時宇治町長の岩井勘造から依頼された『宇治名勝案内記』は32年11月初版、32年12月再版、33年2月三版、33年5月四版で、「以上発行部数一万八千冊」(宇治, p24)で34年9月訂正五版という具合に「版を重ねる事九、発行部数

三万五千を数へたる」(岩井、夢, p278)名著となり、「隠れたる風光遺跡は大に世に伝称せられ、我(宇治)町今日の基礎と相成候事寔に感激の至」(岩井、夢, p278)と地元から感謝された。この『宇治名勝案内記』は縦15×横11cmの携帯を考慮した小判サイズ、総頁数わずか22頁であったが、県神社の大祭について「近畿地方より参詣する人幾万といふを知らず。鉄道会社は終夜汽車を發して旅客を運輸」(宇治, p11)と指摘する。産業に関しても幕府から茶の取締を命じられた代官「上林両家」の事蹟はもちろん、「近来窯元松林松之助は大に意匠を凝し雅品を製出す…宇治名産の一なり」(宇治, p16～7)と朝日焼を詳しく紹介し、亀石鉾泉(松本芳太郎)、浮舟園、朝顔園などの草木園など、細かい活字でギッシリ観光情報を盛り込んだ。多くの場合、関与した人物名も明記するなど彼の調査は徹底していた。しかし掲載広告は宇治茶の「製造元中村藤吉」1件のみ、本文で紹介する旅館等の広告もなく営業的な姿勢、広告収入確保による印刷費の低減意図などがほとんど感じられない。(同時期の東京の探勝会の本格的な商業出版物との比較)また奥付の発行所に「京都探勝会」とあるほか、一切探勝会の紹介記事もなく、会員を広く募集するような組織拡大意図もうかがえない。要するに大手の書店の売捌きもなく、舟木個人の私家版にすぎない案内記の発行部数が会員数の10倍以上の3.5万部にも達したのは当時としては驚異的であろう。

柳昇と号した舟木の著作物は『『五十年の夢』前編上下二巻の外、紀行、紀聞、雑録の類を算する時は正に数十冊、之を積むに殆んど等身に達す』(夢、小引)るほどであった。「旅行記は主として明治三十一年、探勝会設立前後に於けるものにし

て、概ね旅行後数ヶ月にして成りしもの多く、其梗概は当時の探勝雑誌又は新聞紙上に掲げられた(夢、小引)のである。『五十年の夢』等で刊行ないし執筆が確認できた旅行記は[表-2]の通りである。長男の舟次郎は遺稿編纂に際して「旅行記の一部を登載の見込みなりしも…他日続編刊行の機に譲り、こたびはすべて省」(夢、小引)いた。この続編は結局世に出ることはなかった模様のため、残念ながら現在図書館等で現物を閲覧できるものはごく一部にとどまる。

舟木宗治の死亡した大正6年以降の大正8年10月6日舟木宗治著『柳昇遺稿 五十年の夢』(国会図書館蔵書)が、父の遺稿を長男の舟木舟次郎の名前で非売品の私家版で刊行された。この遺稿集に寄せられた知人達の「故人に対する追想の玉稿」(夢、小引)の中から舟木の性向を端的に評した言葉として、①「一個の大旅行家」「有名なる探勝家」(川村、夢、p276, 279)、②「探勝博士」「博覧強記と筆まめ」「一種の大なる社会教育家」(田村撫松、夢、p282 ~3)、③「京都市公民の標本」(雨森菊太郎、夢、p294)、④「探勝癖」「青谷の小節堂¹⁴⁾」(関口秀範、夢、p299)、⑤「親切と質実との権化」「搔い処に手を届かしめたる、この親切」(川村、夢、p278, 280)などがある。観光デザイナーとしての舟木語録として以下のような直話が残されている。①「旅行から帰って其紀行文を書いて居ると其地を再び旅行して居る気になって楽しい」(川村、夢、p277)、②「学校の先生や官吏などの方々は毎日肩の凝るやうな細かい仕事に頭脳を使うて居るのですから、時々休日などを利用して金のかからぬ方法で旅行を試み名勝旧蹟を探り歩かれるのはお薬にもならうと思ひます」(田村、夢、p281 ~2)、③「汽車の切符は赤に限る。着時刻は

白も青も赤も均しく同一なり。寧ろ赤の三等車客となれば世間各種の人々に接し無聊を覚へざる唯一の最良策。兼ては其上級車賃を節し第一流の旅館に投し旅情を慰藉するに若かず」(草間、夢、p293)、④「旅行は草鞋に限る、汽車は赤にてよろし、只旅館のみは其地の一等宿舎に投ず」(杉野方義、夢、p300)など。

舟木の旅は「翁が旅行はいつも単独である。さうして足跡は殆ど天下に洽しといふべく」(川村、夢、p276)、「旅装も亦風采を顧みず、辺幅を飾らず所謂赤毛布式を發揮して毫も虚榮に囚はれず」(草間、夢、p293)との独自のスタイルを貫いた。そして「緻密にして細事をも洩さずこれを筆記に留めらるる」(桜井丈太郎、夢、p295)舟木の真骨頂ともいふべき「旅中携帯のノート」には「汽車の発着時間から、乗車賃金から、名所旧跡の道のり、人車馬車の料金、さては旅館の茶料宿泊料、朝夕の膳部の献立等まで、細大漏らさず子細に書き留め丁寧に保存」(関口秀範、夢、p299)していた。節約を旨とする舟木があえて「旅館のみは其地の一等宿舎に投ず」る主義なのは当時の和風旅館の接客ぶりには強い不満を持っていたためであろう。「京都策として旅館の改良、旅客吸収の意見ある」¹⁵⁾舟木は例えば吉野山は「花期に於て一年の計画を為す地なれば随て物価も高価にて旅館の如き待遇も為さずして…一室に数人混宿せしめ…」(川村、夢、p280)と強く旅館の改良方を提起した。

舟木は「旅中携帯のノート」に基いて「必ず江湖に発表し、探勝雑誌に登録するの外、或は所在地なる京都日出新聞に寄書掲載」(草間、夢、p293)した。舟木の見聞記は「大は見るべき自然の山川風土の状態を始め、地方々々の歴史沿革並に現代文明の社会百般の施設経営の状況から小は言

14) 齊藤拙堂は伊勢津藩の儒学者で、1830年『月瀬記勝』を著して月ヶ瀬梅林を世に知らしめた功労者。

15) 「市税軽減論」『名家訪問録：京都策』明治36年、p189。

語風俗習慣及び旅行上の注意等に至るまで細大漏らす所がない」(田村、夢, p283)、「旅程旅費の経済的なる」(川村、夢, p278)と好評であった。

探勝会活動の成果として、当時まだ無名に近い京都府綴喜郡の青谷梅林は「翁の紹介によって世に顕はれ」(川村、夢, p281)、「探勝案内の小冊子に入るや、青谷の名は一時に喧伝し、村では保勝会が組織され、茶店が開かれ、無料休憩所携帯

品預所が設けられ、梅日和に杖を曳く者、和の月瀬も一籌を輸するばかり」(関口秀範、夢, p299)と、地域振興にも寄与した。宇治でも個別に修繕すべき建物等を列挙して「今にして保存の道を講ぜずんば其遺趾或は埋没するものあらん…此地の有志家発起し内外の有志の士之に賛同して宜しく宇治保勝の挙あらん事を切望」(宇治, p24)するなど、訪問地の地域との連携にも配慮した。

【表-2】 京都探勝会から刊行した著作物等のリスト

32年5月頃	『奈良春日の藤と初瀬の牡丹 京都探勝会第一回旅行』京都印刷
32年10月2日	『宇治名勝案内記』初版、京都印刷(林虎之助)30頁
33年10月2日	『山城丹波 京都鉄道線路園部八木附近名勝案内記』
34年2月22日	『勝区探遊 梅林案内記 附梅林』18頁
34年2月30日	『勝区探遊 桜花案内記』30頁
34年4月23日	『勝区探遊 花のいろいろ』18頁
34年4月30日	『乙訓名勝案内記』京都印刷、12頁
34年6月29日	『温泉海水 避暑案内』16頁
34年9月21日	『勝区探遊 秋のいろいろ』16頁
34年12月30日	『勝区探遊 参宮案内 附会務雑録会員名簿』26頁
35年3月5日	『勝区探遊 梅花案内 附天満宮御由緒地』16頁
35年3月29日	『勝区探遊 桜案内 附吉野山讃岐漫遊』16頁
35年7月1日	『勝区探遊 山陽九州漫遊紀行 附信甲遊歴日記』18頁
35年7月1日	『勝区探遊 富士登岳案内 附避暑地温泉海水浴等』16頁
35年9月20日	『勝区探遊 秋の遊楽 紅葉其他』16頁
36年1月5日	『内国漫遊 探勝紀行 附会務報告』16頁
36年2月24日	『第五回内国勸業博覧会案内』18頁
36年2月27日	『勝区探遊 花暦の春巻 梅、桃、桜』20頁
36年3月20日	『勝区探遊 花見案内 春季初夏』18頁
36年6月21日	『勝区探遊 東北漫遊紀行』16頁
36年6月27日	『勝区探遊 消夏案内』16頁
36年10月10日	『全国鉄道沿線著名名勝案内』14頁
36年10月15日	『勝区探遊 秋の落葉 附日本三古碑本朝三銘』16頁
37年3月8日	『探勝会雑録 附採鉞旅行会員名簿』4頁
38年6月5日	『内国漫遊 探勝雑誌』16頁
39年3月20日	『内国漫遊 探勝雑誌』16頁

【資料】『探勝会出版目録』『五十年の夢』、p270～1 ほか。

探勝以外の分野での著作、改訂版、会発行の絵葉書等は省略。

こうした探勝会の実績への評価として「各鉄道会社は翁の旅行鼓吹を徳として時々優待乗車券を呈するに至れり」(田村、夢、p282)とあり、草間和楽は大正7年「輓近…探勝遠足の団体各地に簇立するは吾人健康上最も喜ぶべき現象にして、其勃興は恐らく<舟木>君の主唱を以て嚆矢と与って最も力ありと云ふべし」(草間、夢、p293)と、探勝団体の嚆矢と解した。長男の保次郎も「当今旅行趣味の普及は又昔日の比にあらず、此点に於て故人所志の一端は既に如実に至れるもの」(夢、小引)と解する。

しかし「君老齢に及び病を得て昔日の元氣は失せた」(桜井丈太郎、夢、p295)ため、「五ヶ年間遠近旅行趣味を作興せし」(夢、p273)探勝会の『内国漫遊 探勝雑誌』も39年3月20日で終了した模様で、探勝会の発足以前の「明治三十年以来」(川村、夢、p278)、43年3月12日付日出新聞の探勝記を金沢の杉野宛に郵送(杉野、夢、p300)するなど「十数年ニ亙ル」日出新聞への寄稿も「大正二年…幾もなくして、病魔の侵す処となり、爾來筆硯又親しからず」(夢、小引)、「君病ノ故ヲ以テ新聞紙ノ寄稿ハ暫ク絶エ」(雨森、夢、p275～6)た。晩年病床に臥した舟木は大正6年4月18日病軀に鞭打って「嵐山の桜花を賞したしとの希望…渡月橋畔に少憩して帰途に就く。是れ外出の最後なりき、其後病勢愈進み…」(舟木保次郎、夢、p273)と随行した長男が記すように、西行、芭蕉などの旅の先達と同様に最後まで自己の観光デザインの夢を死の床にあってなお追い続けていたのもあろう。筆まめな舟木の日記も流石に「病苦の為に大分に粗くなって…夫からズッとぬけて四月十八日に一寸書いて夫以来は絶へて居る」(川村、夢、

p277)が、「花」に強くこだわりをもって各地を探索し続け、折に触れてこと細かく記載し続けてきた舟木の絶筆の探勝地が先に「都の人否鄙の人だも知らざることなき地を茲に紹介するは要なきこと」(「桜花(二)」M34.4.2日出④)とした花の嵐山、渡月橋畔¹⁶⁾とは誠にむべなる哉である。

IV 探勝会(東京)

探勝会(東京)は明治33年7月以前に上野精養軒支配人・妹尾勇吉(探検会の主唱者)、高田乙三(株式会社秀英舎第一工場勤務)、三宅修道(医、探検会の主唱者。後の内務省の勤務医、防疫官)、船尾種熊¹⁷⁾ら避暑を「常に実践せる」(避暑初、p1)「旅行癖」(船尾種熊「旅の心得」避暑三、p3)の学生仲間らにより結成された。春夢と号する会員は「旅行の跡を地図の上に赤線にて引くことにて友人と競争してその延長を誇り居た」(避暑三、p10)ほどであった。

主宰者の妹尾勇吉(東京市神田区駿河台南甲賀町4番地、同会の本部所在地)は明治3年1月島根県仁多郡横田村の「多少近郷に名を知られて居た」(頭、p32)酒造家・妹尾嘉右兵衛門の次男に生れ、島根県の中学時代に奥出雲の偉人でキリスト教徒の岡崎喜一郎の学友となり、立教学校英文科を経て「家に居て家事を手伝ひ、教員となり」(頭、p34)、再度上京して明治33年明治法律学校を卒業した。その後精養軒¹⁸⁾に就職した妹尾は「欧米の業界を見学する事四年、帰朝後支配人となり」(衆、せp2)、新知識を生かして開業時の上野精養軒の支配人として廉価なランチサービスを工夫するなど西洋料理の開拓者の一人であった。

16) 京都嵐山の観光デザインに関しては拙稿「着実に成果を上げていった京都嵐山の事例」『逆転の日本力』第7章「地域からはじまる日本再生」第2節、第3節、跡見学園女子大学マネジメント研究会、2012年、イースト・プレス、p197～218参照。

17) 探検会の主唱者・山本種熊と同一人か。ほかに七戸篤次郎(探検会の主唱者。後の岩手県教員)、大岡哲吉(探検会の主唱者)、伊原青々園、春夢など。「京都金閣寺 第六回探勝会員記念撮影」との絵葉書が存在するが、多数写っているのは東京の探勝会員であろうか。

下谷の待合経営者・後藤儀太郎とともに大正4年には郷里・安来節レコードの宣伝¹⁹⁾にも一役買っている。大正6年独立して燕楽軒を千葉県館山町に開業したほか、海岸ホテル、美術館宝生会、京王閣各食堂を経営、趣味は「旅行、美術」(衆、せp2)、川端玉章の絵画「加茂競馬」等を所蔵²⁰⁾する美術愛好家でもあった。

有力会員の一人・高田乙三(神田区鎌倉町3番地)は株式会社秀英舎社員として第一工場に勤務していた30年8月景勝地の逗子に立派な案内書がないことを痛感し自ら『逗子案内誌』を自費出版し、勤務先の秀英舎で印刷、徳富蘇峰から序文を寄せられている。探勝会の刊行物でもこの分野に強い印刷会社側の代表者の立場で種々便宜をはかったものと思われる。

33年7月「都下幾万の学生諸君」(避初、巻末)に呼び掛けて、大岡哲吉、安吉一雄(医)、竹内正純、松田善吾、水谷信之ら8名が主唱者となり、探勝会代表者妹尾勇吉も加わって定めた「探検会趣旨及規約」には「同志相謀り一の探検会を組織し毎年夏期休業を期し、這般人跡未踏の山河を踏破し以て大に山紫水明の秘境を発かんとす…本会は体格虚弱と認むる人は入会を謝絶すべし…本会は博物学、地理学、地質学、其他の専門家及新聞記者諸氏の同行を希望する」(避初、巻末)とあり、「本会は別に役員を置かず、総て…探勝会に於て事務を取扱ふ」下部組織として発足した。第一回探検活動の目的地は「八月一日より利根川の水源に遡りて探検を試むべし」(避初、巻末)とある。探検趣味に特化した別働隊の「趣旨及規約」を示したのは本隊の探勝会規約が未入手のためである。

探勝会の代表妹尾勇吉らは当初「全国各地の避暑地を網羅せん」(避初、p1)との計画で33年7月14日全国の避暑旅行のプランと旅の心得からなる『避暑旅行案内』の第一版を編纂し神田神保町・上田屋書店を大売捌所としたが、「旅行癖の探勝会等昨年初めて避暑案内を世に公にせしが意外の好評に一同乗地になり」(船尾種熊「旅の心得」避三、p3)、34年6月30日第二版を、また35年7月には大売捌所(上田屋書店に大阪備後町・盛文館を追加)から「此度増補大訂正の上第三版を出」(避三、p3)した。第三版の「旅の心得」には「宿を需むるにも中以下の処はよろしく見合すべし…怪しげなる家に入り不慮の災を招く可からず」(避三、p6)と各地一等旅館を推奨、「汽車汽船の時間表は近来毎月必ず出版するものあり…必ず其月の分を、求め行く事」(避三、p7)などの注意を喚起している。また巻末の広告欄には大宮・萬松楼、大森・伊勢源、江ノ島・金亀楼、逗子・養神亭、駿河牛隊・三島館、御殿場・不老館、成東鉦泉・成東館(巻頭にも1頁大広告)、赤倉温泉・香岳楼、仙台・針久、磯部温泉・蓬萊館など著名な「各地一等旅館」の名簿が付されている。たとえば本文で萬松楼は「公園より湧く鉦泉を引きて、館内に浴室を設け…」(避初、p2)、伊勢源は「明治二十九年東京の割烹店伊勢源主人初めて此処<大森>に料理店を開業…」(避三、p16)と詳しく紹介、「各地の旅館等よりは、参考となるべき材料」(避初、p2)として写真、富士登山順路の図などの提供を受けるなど、本文の記載と広告主の出稿とは連携していた。

『避暑旅行案内』の初版から三版の間(明治33~35年)は会を主宰する妹尾が法律学校を卒業し

18) 妹尾は大正2年10月現在では北豊島郡巢鴨駒込伝中、正味身代5,000円~1万円、商内高2,000円~3,000円、信用程度普通、所得税大正元年15円(『31版商工信用録』東京興信所、大正3年、p531)、「宗教真言宗」(衆、せp1)ながらYMCAの会員でもあった。「特別の関係よりして…引立てられた」(頭、p33) 恩人・北村重威(元岩倉家々令)の伝記

『北村椿庵翁略伝』(私家版)を刊行した。

19) 「安来節 流行の歴史」
yokoya2000 sites.google.com/site/yokoya2000/to-dos
(平成25年3月20日検索)

20) 川端画学校編『玉章画集 古稀号』明治44年。

て、精養軒に就職する35年までの定職のない時期に相当する。しかし「精養軒の先代…創業者たる北村重威翁…からも此処の支配をして呉れと云ふ勧め」(頭, p32)を受けて「明治三十五年を以て愈精養軒に来」(頭, p32)た妹尾は「翌三十六年翁の命により欧米のホテル業を視察見学する為め洋行の途中に就き」(頭, p32) 中心人物の長期不在という事態に、探勝会は36年ごろに自然消滅したのではないかと推測される。帰朝後の明治42年7月の彼の随筆では探勝会に言及していない。

V 大阪探勝わらぢ会(大阪)

大阪探勝わらぢ会は朝鮮視察旅行や台湾観光など「旅行好きの旦那さん衆が集まってよく海外旅行や国内旅行をした」²¹⁾団体である。「わらぢ会」の名称からみて地図等有力出版社である大阪和楽路屋・日下伊兵衛²²⁾が明治39年前後に組織したのと考えられる。わらぢ会は組織として幹事を置き、「申込所」を嘱託した。大正2年に『阪堺附近精図』という地図を製図し、和楽路屋から出版したり、会の旅行記録として『道つれ わらぢ会旅行集 草鞋かけ日かへりの栞第1輯』を編纂、日下伊兵衛が刊行している。名義は区々であるが、会員組織のわらぢ会、地図出版業者の和楽路屋とも日下伊兵衛が主宰したから、実質一体関係にあったのと考えられる。

わらぢ会の特色として地図の製図・歩測調査旅行の傍ら、神武天皇の戦跡と伝えられる奈良県富雄川の長久寺に『金鷄発祥の処』と刻んだ顕彰

の碑が立ってをる。大正三年十月十一日…大阪探勝「わらぢ」会といふ団体が建立した²³⁾とされる。わらぢ会が上部に方位を刻んだ建碑を各地で行って会名を誇示したのは、おそらく地図測量隊が水準点を各地に設置する流儀に倣ったものでもあろうか。

VI 神戸草鞋会(神戸)ほか

明治43(1910)年神戸在住の英国商人グループや、外国人のグループMGK(The Mountin Goats of Kobe)のワレーらが登山道を整備している姿に感じて、会員を募集し市民層の裏山登山を目的として塚本永堯らにより「神戸草鞋会」が発足した。揺籃期六甲山の開発は明治28年、英人グループが三国池畔に別荘をつくったところにはじまる。塚本永堯²⁴⁾が主宰したこの団体には多くの会員が参加し、植林間もない花崗岩をむきだしにした六甲山の植樹や、烏原貯水池から摩耶山まで約40Kmの登山道(通称徳川道)の開発整備などもおこなった。後に同会は神戸徒歩会(Kobe Walking Society)、関西徒歩会へと改称・発展した。神戸という土地柄から外国人も多数会員になったので機関紙は英文でも併記された。大正2年から定期的に機関誌『ペデスツリヤン(pedestrian)』を発行している。先行する神戸草鞋会等になんらかの刺激を受けたのであろうか、六甲山という格好の裏山を有する阪神間や神戸・大阪方面では、恵まれた地の利を活かす形で本格的な山岳会等の系譜とは別に、大正期から「アルカウ会」など

21) 大阪探勝わらぢ会と地図の和楽路屋-Yahoo! ブログ-Yahoo! JAPAN
blogs.yahoo.co.jp/isami0911/11622891.html
(平成25年3月20日検索)

22) 日下伊兵衛(大阪市西区新町3)は図書出版業、
所得税207円、営業税186円(紳, T13, p244)、
地図商・わらぢ屋、所得税731円、
営業税199円(紳, S6, p103)、所得税1366円、
営業収益税223円(紳, S15, p112)

23) 『神武天皇鳳蹟志』昭和12年, p65。
同会建立の碑は養老公園、香取神宮、仙酔島、
道後温泉などでも現存が確認されている。
建碑したわらぢ会、青遊会、大阪旅行クラブの活動は
いずれも『旅』の「各地旅行団消息」欄で紹介されるなど、
同時期に同一地域で同種の活動を継続する間柄で、
大阪の旅行団体間で景勝地への石碑建立で
張り合っていた可能性が高い。

様々な名称の徒歩会・登山会が次々に出現し、全国でも珍しい、毎日登山という神戸市民のレクリエーションは、明治時代から連綿として続いている。(落合, p284 以下)

これらのうち日本アルカウ会(本部/責任者豊中村山崎彦磨)は御影町の薬局主・草薙彊が会長、山口銀行員(紳, T13, p260)の山崎彦磨²⁵⁾が副会長として主宰した。大正5年から機関誌『アルカウ趣味』を発行、大正11年には講演録『山岳美』を刊行、SP盤で「日本アルカウ会々歌」を出したり、昭和9年比良に望武小屋を造営するなど多彩な活動を展開した。日本アルカウ会に続き、大正4年神戸商業徒歩会、神戸高商登山部、大正5年神戸ボテグツ徒歩会、神戸野歩路会などが発足した。日本婦人アルカウ会は日本アルカウ会が女性だけの登山クラブ日本婦人アルカウ会本部(神戸・阪神間)を併設したもので、同様に「ユコウ会」にも「婦人ユコウ会」があった。こうした市民の毎日登山や女性だけの登山クラブは神戸・阪神間の特色であったが、大正9年には東京、横浜等にも各地のアルカウ会が発足、田山花袋等の指導を受けて有力組織に発展した東京アルカウ会は出版部を置いて機関誌『旅』を刊行した。これが後に日本旅行文化協会に移管されて著名な雑誌『旅』になるのはいうまでもない。

VII むすびにかえて

三都に神戸を加えた大都市に限定した考察ではあるが、地域・コミュニティから生れた探勝会

等の旅行愛好団体は当然のことながら、主宰した人物の個性だけでなく、所在する地域性(=会員の平均的な個性に近似)を色濃く反映した内容となったことが特色といえよう。すなわち京都のみやびを背景とした御所商人の主宰した京都探勝会は同好者ともどももっぱら風雅の道を志向し、各地の花の名所にこだわる旅をデザインし、主宰者・舟木宗治自身も最後の旅に花の嵐山を選んで散った。

これに対して大学・高等教育機関が集積した東京の学士連が組織した探勝会・探検会は理系の探検を志向した。海外経験もあり、後に西洋料理・ホテルを経営する妹尾勇吉のハイカラ趣味をも反映した、高学歴者向の観光デザインとなった。印刷会社に勤務した高田乙三の尽力もあり、各地の一流旅館の協賛も得て、同会の旅行案内出版は「意外の好評」で版を重ねるなど商業的にも成功した模様である。

天下の台所として商人が集積した大阪からは、旅行に不可欠な地図等の専門業者・和楽路屋の主宰した大阪探勝わらぢ会は地図商の顧客サービスを、さらに製図工程の協力者の確保等の側面を有していた。旅先に方位石を兼ねた記念碑を建てるという独特の文化も同会あたりが開始したのであろう。この系譜から旅行業者のビジネス・モデルに近似した本格的な大阪探勝青遊会²⁶⁾も出現した。

さらに大都市の裏山に六甲山という絶好のハイキング適地を控えた神戸・阪神間からは在住の外国人からの刺激も受けつつ神戸草鞋会にはじまる

24) 塚本永堯(神戸市中山手通6)は会社員、所得税72円(紳, T13, p88)、所得税101円(紳, S6, p97)、「山上詣」(『日本山岳風土記』宝文館、1960年所収)等の著作がある。

25) 山崎彦磨(豊中市南森木183)は雑誌『上方』に「西宮新酒番舟」を寄稿した多才な銀行マン。山口銀行西宮支店長、所得税89円(紳, S6, p304)、昭和15年では三和銀行中央市場支店長、所得税266円であった。(紳, S15, p322)

26) 大阪探勝青遊会(大阪市久左衛門町三十二番地、電話南七七二〇番)は専門の旅行業者並の業務遂行能力と体制を有していた本格派と見られる。

数多くの徒歩会・アルカウ会など山歩きの系譜を生み出した。さらにロック・ガーデンという岩場の存在は著名なアルピニスト達をも派生した。こうして三都と神戸の旅行愛好団体はそれぞれの所属地域・コミュニティの地域性・デザインに少なからず影響され、独自の展開を遂げているようである。

非営利の旅行団体を主宰した人物はいずれも旅行癖があり、世話づき、筆まめの好人物であり、その人柄のゆえに多くの市民各層が団体に参集したのであろう。主宰者への会員の賛辞は、イギリスで印刷業者から1841年に遊覧列車の手配をして成功してから徐々に専門化していったトマス・クックの「献身的なサービスに感銘をうけた」²⁷⁾ 熱烈な固定客からの感謝状にも通じるところがある。探勝会の妹尾のように直後に観光業界で手腕を發揮したことが実証されている異才も含まれる。彼らの各々の性向や地域性を反映して各団体の描いた観光デザインは多種多様で多岐にわたっていた。非営利の旅行団体の収束状況は京都探勝会を除き、時期的に明確にはできなかつた。しかしこれらがビジネス・モデルとしての旅行業にまで発展できなかったものが大半を占めたのは、あくまで主宰者・主唱者達の個人的な旅行癖・旅行趣味に終始し、さほど団体としての長期存続・発展を意図しなかつたためであろう。特に中年以降に属人的に京都探勝会を發起した舟木宗治の場合、ほぼ唯一の会務の担い手である彼の健康が会の運営・存続を許さなかつたようである。

京阪神と東京という大都市の旅行団体に対して、今回は考察対象から除いたが、宗教的な社寺団体参拝の分野に絞り込んで進出した近江の南新助の場合は20歳の若さで元気いっぱいに斯業を

開始できたことが日本旅行会（現日本旅行）への発展の原動力の一つとなった。（日旅, p34）

伊勢御師、富士山御師など宗教目的の旅行の勧誘者が行った檀那場回り、配札、勸化等の営業活動については近世史の蓄積があるが、近世末期から明治末期までの広義の旅行者等の諸活動については残念ながら近世との連続性の程度など未解明な部分が多く残されているように思われる。今後の研究課題の先取りであるが、もし近江人特有の商才・粘り強さが貢献したものと想定すれば、大都市ではない近江盆地というローカルな市場（近江商人等の富裕層を含む）に立地していた南新助は京阪神とはことなり、社寺団体参拝という派手さがなく地味ながらも継続・反復する巨大な安定市場に巧みに着目して、近江に程近く、地の利を得た京都の本山等に日参して（日旅, p36）、絶大な信用を勝ち得て戦前期に「斯界の第一人者」（日旅, p89）となったものかとも解される。ここでも地域・コミュニティのデザイン如何が旅行愛好団体ひいては旅行者の生成と発展に色濃く影響したことになる。

さらに旅行業の先進国イギリスでも1840年代の「行楽のプロモーターは鉄道会社ではなく、友愛組合のような団体が多かつた」²⁸⁾が50年代には「行楽は企業化されて、友愛組合の行事ではなくなり」²⁹⁾、上述のトマス・クックのような専門の旅行者に代替されていったとされる。遅くとも50年後の日本に登場した探勝会という非営利組織と、和製クックのような存在の南新助らの専門旅行者に成長していく営利組織との間に、イギリスで見られたような代替関係が生じたのかどうかなど、検討すべき課題は多く残されている。

27) 28) 29) 荒井政治『イギリスの経験 レジャーの社会経済史』東洋経済新報社、平成元年, p100, p69。

Beginning and Limitation of Tourist Clubs Such as the Kyoto Tansho Kai (Sightseeing Club)

**Founders as "Tourism Designers" Produced in
Local Communities in the Meiji Era**

Isao Ogawa

Japan has a tradition called *kob*, or group trips for religious purposes, which started before the early modern period. After the country's school system was established in the early Meiji period around 1870, educational group trips started to be offered in the form of excursions and school trips. Moreover, a number of travel enthusiasts got together and formed tourist clubs simply to enjoy traveling together. Such clubs were common and active before World War II.

This paper will take a close look at the original structures and styles of clubs established during the Meiji period and often called sightseeing clubs. Founders of such groups in large cities such as Kyoto, Tokyo, Osaka and Kobe, purposes and themes of their trips, and relationships between the clubs' local characteristics and nature of trips planned were examined.

Relationships between club founders' hospitality and their activities were studied, with the main focus on the oldest of the groups -- Kyoto Sightseeing Club, whose activities were traceable to a certain degree. There are significant differences between the tourism design of the Kyoto club and that of its Kobe counterpart that can be attributed to regional characteristics: Kyoto is full of ancient temples and shrines, while Kobe is surrounded by mountains. Yet, the nature of founders as tourism designers had a larger influence on each club's

direction. A Tokyo club organized by students preferred adventurous trips. One in Osaka was founded by cartographers and thus often went on trips associated with a map. They often built monuments in commemoration of surveys they conducted.

Activities of many of these organizations were limited, due to the personal circumstances of their founders, and they were designed for personal pleasure rather than business purposes. Thus, most of the clubs did not develop into established businesses or professional travel agencies.